

私の戦争体験

お話の数々

大切な 大切な
本当に体験した

お母さんといつしょに
読んでみましょう

おじいさんやおばあさんが



清造兄ちゃんは帰つて来なかつた

堺市 北山絹代（68歳）

濃い教育でした。

教科書も姉たちの本とは少し違つたように記憶しています。幼かつたので確かにではありませんが、街頭で「内閣総理大臣が東條英機（※②）に変つた日本はどうなつて行くか」と書かれたビラを見たように思います。

学校では「撃ちてし止まん」「一億一心火の玉だ」「欲しがりません勝つまでは」などの標語（※③）が当たり前の生活、そんなものだと大きくなりました。鉄の供出（※④）も進められていて、父が若い時お茶お花をたしなんでいたその茶釜も花器など鉄と名のつくものはすべて供出してしまいました。

我が家に、母の実家の裏の家の清造兄ちゃんが下宿して大阪の工場へ働きにきていました。昭和十八年の秋、召集令状（※⑤）が来て出征（※⑥）して行きました。昭和十九年学童疎開（※⑦）が始まり私は兄とともに母の実家へ縁故疎開（※⑧）しました。清造兄ちゃんの家のおばさんは、毎朝陰膳（※⑨）を供えて我が子の無事を祈つておられたのだと思います。清造兄ちゃんは南方へと行つたとだけわかつていましたが、その他のことは○○部隊というだけで国民には何もわからない状態だったのです。戦局（※⑩）が不利になりそれでも「日本神国（※⑪）必ず神風（※⑫）が吹く」と大本營（※⑬）発表はすべて本当のことは国民に報せてなかつたと思います。

そして、二十年八月十五日終戦。十一歳の私はなんの思いも感じません。ただ清造兄ちゃんが帰つて来てくれたならあと思ひました。終戦の後に戦死の公報だけでした。赤紙一枚で召集され、一枚の紙で死亡の知らせで清造兄ちゃんの人生は終つたのです。

今、ふるさとへ帰つてもおじちゃんもおばちゃんも鬼籍（※⑭）の人、清造兄ちゃんの年代の人はみな戦死したと聞きます。終戦後、村ではお葬式が続いたことを憶えています。

あれから半世紀以上。戦争の悲惨さを次世代の子どもに伝えるのが戦争を体験した私たちの使命だと思います。

毎日、夜になると、一人二人三人と寂しさが伝わり泣く子が増え、私もその一人でした。ひと月くらい続きましたが、少しずつ慣れて冬には大雪も初めてのことでした。やがて新しい年になり、四月には五年生、お寺も変わり男子と女子が一緒に生活をするようになり、畠仕事のお手伝いをしたり、自分たちで野菜を作りました。

「早くこの戦争が終つてほしい」と思う毎日でした。昭和二十年八月六日のよく晴れた朝、みなは畠へ作業に、私と二、三人はその朝、熱を出していたとき、ぐらぐらと地震のよくな揺れがありました。一日後、お寺の中学生のお兄さんのお友達が来られて、広島県に原爆（※①）が落ちたことを聞かされました。隣の県で大変なことになつているなど思つてもいませんでした。

広島の中学に行っておられた、お寺のお兄さんのお友達のことも、それからのことわかりません。毎週お寺に来て、私たちに歌やお話を聞かせて

私の学童疎開

岸和田市 竹村クニエ（68歳）

※①原爆

ウラン、プルトニウムなどに核分裂反応を爆発的に行なったときに発生する熱線衝撃波・各種放射線で殺傷、破壊する爆弾。米軍は、1945（昭和20）年8月6日広島、9日長崎に人類史上最初の原爆弾を投下した。広島では、子どもたちは校庭に並んだまま、通勤者は電車に乗つたまま、主婦たちは家事をしているままの姿で殺戮された。長崎では、軍事工場に駆り出された生徒や多くの市民が倒壊した建物の下敷きとなつて圧死し、または生きながら焼き殺された。原爆投下からその年12月末までの約5ヶ月間に、広島ではおよそ14万人、長崎では約7万人が命を奪われた。

※②東條英機

軍人・政治家。陸軍大将。東京生まれ。関東軍参謀長・近衛内閣陸相・内相を経て、1941（昭和16）年、それまでの小学校が国民学校に改められた。子どもは、個人の子どもではなく、お国の子どもとして教育され、戦争につながる教育がおこなわれた。

※③標語

主義、主張、信条などを簡明に言い表した短い語句。モットー、スローガン。

※④供出
日本軍の敗退が度重なるようになると、国内は金属不足に苦しみ、1942（昭和17）年、政府は金属回収令を出して、飛行機、軍需各相をも兼務。戦況の不利に伴い、44年辞職。敗戦後、A級戦犯として絞首刑。

※⑤召集令状

在郷軍人を召集する命令書。充員召集、臨時召集、国民兵召集には淡赤色の紙を用いたので、俗に赤紙と呼ばれた。

※⑥出征

軍隊の一員として戦地に行くこと。

※⑦学童疎開

1944（昭和15）年、政府は米軍の空襲に備えて「学童疎開方針」を決定、国民学校の3～6年生を都市から地方に分散させることにした。

※⑧縁故疎開

血縁・姻戚などの縁つきや知人・友人などをつけてたよりに疎開すること。

※⑨陰膳

出生した人の安全を祈つて、留守宅で用意して供える食膳。

※⑩戦局

戦いの局面、なりゆき。

※⑪神国

神が基を開き、神が守護するという國。

※⑫神風

神の威徳によって起るという風。元寇の際に元の艦艇を沈没させた大風をいう。太平洋戦争中の特攻隊の呼称。

※⑬大本營

戦時または変事の際に設置された、天皇に直属する最高の統帥機関。

※⑭鬼籍

過去帳。（「鬼は死者の意」。お寺に葬つた人の法名、俗名、死没年月日などを書いた帳面。

くれたお兄さん。今も八月六日は私にとっては忘れられない一日です。
十一月にやっと大阪に帰ることができました。一年二ヶ月ぶりに母のそばに戻り、戦後の物のない時代を体験しました。

今の子どもたちには考えられないことだと思います。今も、多くの人の犠牲の上に今の平和と幸せがあることに感謝の日々を過ごしております。

戦後の兄の戦病死

大阪市 丸岡澄子（77歳）

両親と兄・姉・私・妹の平凡な六人家族の暮らしの中で、父(ふ)母(ぼ)にとって一人息子の兄はかけがえのない大切な子どもでした。

私は五歳はなれていて、旧制中学校に入学した時、詰襟の学生服姿は、当時小学生の私にとって頼もしい大人になつたように思えました。

そんな兄が、昭和十六年十二月の真珠湾攻撃(※①)があつた翌十七年二月、角帽・黒詰襟服からカーキ色の戦闘帽(※②)国民服(※③)という姿で、奈良中部第六十七部隊へ入営し、昭和十八年八月、外地(※④)前線(※⑤)へ出発することになりました。

真夏のある日、最後の面会に父母と一緒に奈良へ参りました。限られた数分間しか面会できず「体に気をつけて……」くらいしか言えませんでした。そして午後、大勢の兵隊が一団となつて、国鉄奈良駅から出発するのを道端で見送り、家族のうち一人だけが駅に入るのを許され、母がプラットホームから見送りました。

当時は、外地前線へ出発する兵隊を乗せた輸送船が目的地に着くまでに、敵の攻撃を受け沈没することが多く、その度に尊い命が船とともに海に戦地へ着いたのだとホッとしました。早速こちらからも宛先の部隊宛てに便りを出しましたが、届いたかどうかはわかりません。

戦時下の様子はあやしくなり、あちこちで空襲も激しく、そして原爆投下・ソ連の参戦となり、あの八月十五日を迎えてきました。
戦争が終り、りんごの歌(※⑥)が街に流行った頃に、毎夕放送される復員(※⑦)便りの数分間…。耳をそばだてて聞いたものです。

北支派遣〇〇部隊、中支派遣〇〇部隊などと中国方面からの引揚げは、割に早かったのですが、南方でも最前線の南海派遣の部隊名は、お正月が来ても聞く事が出来ませんでした。二月も半ばを過ぎてやっと、南方からの部隊名がラジオからきこえてえきました。

しかしそれよりも前に兄は浦賀港へ着き、病気のために帰宅除隊を許されずに入院し、既に帰らぬ人になっていたのです。南海派遣の部隊名が放送されたのと同時に病死の電報が届き、悲しみの底に落ちた両親がぐに、一緒に帰ってきた戦友(病気の)もいるはずと、様子を聞きに浦賀港に駆けつけました。切符を手に入れるのも一苦労でした。行つた先の検疫所の病室は粗末な部屋だったそうです。窓ガラスも割れ、申し訳のようにボール紙をあてがつただけで、二月の寒い冷たい風が通り抜けるようなひどい処だつたそうです。病人の世話をする看護婦さんも手が足りなかつたものか、病人への扱いはとてもひどいものだったようです。酷暑の南方から栄養失調の身で、極寒二月の内地(※⑧)に戻りながら、肉親にひと目合うこともなく帰らぬ人になつたことは、本人は勿論、私たち家族も本当に無念の想いでいっぱいです。二十五歳の短すぎる人生でした。

※①真珠湾攻撃
1941(昭和16)年12月8日、日本海軍の機動部隊がハワイ・真珠湾に集結してアーリア太平洋艦隊を奇襲攻撃した事件。これによって太平洋戦争が始まった。

※②戦闘帽
戦闘用の帽子。旧日本軍が戦時に用いた略帽の俗称。

※③国民服
太平洋戦争中、日本で広く行われた軍服に似た男子の服装。国民が常用すべきものとして制定された。

※④外地
国外の地。もと、日本固有の領土を内地といつたのに対して、それ以外の領有地、すなはち朝鮮、台湾、樺太などの総称。

※⑤前線
戦場で、敵と直接に接触する最前列。

※⑥リンゴのうた
♪赤いリンゴにくちびる寄せて黙つて見ている青い空
リンゴはなんにも言わないけれど…。敗戦直後、大流行した歌。

※⑦復員
戦時の体制にある軍隊を平時の体制に復し、兵員の召集を解くこと。この場合は、召集された兵士が外地から帰郷すること。

※⑧内地
国の領土内で、新しい領土または島以外の地。日本でもと朝鮮、台湾、樺太(サハリ)などを除いた領土を指した。

封すると、「この方は弱っていた兄よりも何日か後から帰郷し、「帰つたら、会おう」と約束していた兄への封書でした。父が、肉親とも会う事も無く戦病死した経緯を知らせ、戦地での様子を詳しくお聞きしました。転戦(※⑨)、転戦で現在のショートランド付近の小さな島で終戦を迎えたようで、イギリス兵が占領軍としてやってきたとか。転戦といつても言い換えれば、逃げていたようです。食べる物もなくなく、食料探しと塹壕(※⑩)堀りばかりの毎日だったようです。

兄の遺骨が終戦後丸一年の昭和二十一年の真夏のある日帰つてくることになりました。軍隊に属したままの死亡(戦病死)だったので、遺骨が帰つてきたのも、亡くなつて半年も過ぎてからでした。それを迎えて改めて我が家でお葬式をいたしました。

戦争というものは狂気の沙汰で、今もつて世界で戦がなくならないのは本当に悲劇です。

あれから半世紀以上経ち、五十回忌もとうに終えて、父が建てた戦死者の細く高い兄の墓石の前で手を合わせ、今は亡き両親と兄がゆっくり天国で語り合つてゐるだろうかと思ひやつてゐます。

忘れる事のできない、戦後の兄の戦病死です。

歳を重ねた今は、平和で贅沢、何の不足もない生活を続けられる毎日を感謝しつゝ、孫子の代にもずっと戦争が起きぬよう願うものです。

南の島で

美原町 花光由太郎 (91歳)

※①海南島
中国広東省の南にある島。面積は3万4千平方km余で、台湾よりやや小さい。良質の鉄鉱石を産出。サトウキビ、ゴム、ヤシの栽培が盛ん。

昭和十八年六月頃に召集され海南島(※①)へ行くこととなつた。陸軍なら大阪から出兵(※②)するのだが、海軍から召集されたため、広島から武器

※②出兵
軍隊を派遣すること。派兵。

も持たず輸送船二隻で、海軍に護衛され出港した。

※③身重
妊娠していること。

二人の子供と身重(※③)の妻を残し自分は死ぬだらう。子供たちは父なしで大丈夫だらうかという思いをかくし「勝つてくるぞと勇ましく」(※④)家を出る私に、妻もお国のために出兵する私に、親の值打ちが下がるからと涙

※⑤気丈
現地に着き銃や剣などを支給され、三十発入りの弾の入れ物を四つ、計百二十発の弾をベルトにつけ腰に巻き銃を持つ。中隊長の従兵(※⑥)となり身の回りの世話をしながら、海軍陸戦隊として戦地での銃撃戦に加わった。音は聞こえるがどこから弾が飛んでくるのかわからず、今まで話していきた戦友が隣で体中穴だらけで亡くなつてしまつたり、手足などを切断されたたちまわり命を落とす者、捕虜(※⑦)となる者など様々な人の最後を見つめた。

※⑥従兵
将校に専属し、その世話をする兵。将校当番兵。従卒。

※⑦捕虜
戦争などで敵に捕らえられた者。とり。

まわり命を落とす者、捕虜(※⑦)となる者など様々な人の最後を見つめた。中には人を人と思わず、味方にも敵にも平気でひどいことをする身分の高い人もいた。

※⑧赤米
外来の下等米の一品種。小粒で味は悪いが、炊くとよく増えるので、貧しい人々の間で広く用いられた。

食べ物は赤米(※⑧)という赤く細長いねばり気のないバラバラの米、ヤシの実の汁、バナナなど。最初はまずくて食べられないが、時間が経つにつれ食べられるようになる。現地の水には毒が入つてゐるというウワサが流れたので、現地の人のサルを使いヤシの実をとらせ水分をとつた。戦地で三年がすぎ、いよいよ終戦の時、隊長などには連絡が入つてゐるだらうに教えてくれなかつたが、数週間後自ら悟つた。みんな死を覚悟して戦つてきたため、敗戦を受け入れられずに別の隊をつくり、事件をおこすことを防ぐためだつた。戦争が終わればえらい人もただの人。ひどいことをしてきつた人は、終戦後身分の下の人たちに仕返しをされているのを見た。

終戦をむかえてもいつ日本に帰れるかわからず、食料もなく軍服(※⑨)などを現地の人々に売り食いつないだが、いつまでこの状態が続くかわからなかっため、全部手放すわけにもいかず考えて少しずつ売つた。現地の人の中には、

※⑩塹壕
戦場で、敵の攻撃から身を隠す防御施設。溝を掘り、その土を前に積みあけたもの。

※⑪転戦
あちらこちらと、場所を変えて戦うこと。

金をわたすふりをして物をとつて逃げていく若者もいた。

やつと日本に帰れたのは終戦から約一年後、帰国しても食糧難のためみんな生きてきた。もし私が戦死していたら、この事を話すこともできなかつたし、かわいい孫やひ孫とも会うこともできなかつた。子孫のためにも同じまちがいをくり返してはいけないと強く思います。

(代筆 八尾一恵)

八月六日、広島で被爆

堺市 古山幸子（61歳）

広島に原爆が投下されて五十八年。私は満州國（※①）奉天市で生まれました。終戦前に父を残して広島に引き揚げて来ました。

八月六日。母は八時前に家を出て、そのまま雜踏の中に消えてしましました。女学生だった姉三人は学徒動員（※②）中に工場で被爆しました。私と兄は、数日前、母の実家へ疎開準備のために、先に預けられており、難を免れました。

広島女学院に通っていた姉三人は、疎開先である竹原市に戻つてきましたが、数日で髪の毛が抜け酷い下痢で苦しみ、相次いで命を落としました。当時坐棺（※③）で葬られていたのを覚えています。もう一人の姉は広島第二県立女学校だったのを被爆後、別行動。友達と一緒に立つて走つて逃げたそうです。途中バタバタと友達が倒れそのまま永久の別れとなり、惨いものでした。食べるのも無く、道端に生えてた草を引きちぎって飢えを凌いだと、五十五年振りに初めて話してくれました。

やつと軍人に助けられた姉は、陸軍病院で右腕の火傷の手当をしてもらいました。火傷はモコモコのケロイド（※④）として残り、ずっと長い年月包帯で隠しておりました。後に結婚して二人の子どもに恵まれ幸せな生活を過ごしておりましたが、子どもが扁桃腺の手術の後、鼻血が止まらず、緊急入院しました。その時は被爆二世の白血病では：とかなり恐怖感に襲われた様子でした。子供に付きつきで看病していた一ヶ月余の姉の心中を思うと堪りませんでした。戦後十五年も過ぎたのに、何時襲われるか分からぬ恐怖に苦しむ姉でした。

私と兄は三歳余と五歳。母を亡くし、広島の山奥の叔父宅に祖母と世話をになりました。何家族も疎開して来ましたので、何かと不自由な生活をみな我慢しながら過ごしました。おやは、畑のキュウリ、生の人参、道端に生えているスカンボ（※⑤）を折つて、空腹を満たしました。秋、よその庭から柿の実が美味しそうにのぞいていたので、兄と二人こっそり取つて食べたのが見つかり酷く叱られました。

父が青島（※⑥）より帰つて、尼崎工場勤務となり被爆した姉も一緒に新しく病院におりました。火傷はモコモコのケロイド（※④）として残り、ずっと長い年月包帯で隠しておりました。おやは、畑のキュウリ、生の人参、道端に生えているスカンボ（※⑤）を折つて、空腹を満たしました。秋、よその庭から柿の実が美味しそうにのぞいていたので、兄と二人こっそり取つて食べたのが見つかり酷く叱られました。

戦争は命を奪い、人を傷つけ、家族を引き裂き、生活は一変し、苦しい思いを余儀無くさせられます。平和な今こそ、二度と戦争をしない、憲法九条（※⑦）の重みを確り考えて欲しいと切に願っています。

昭和二十年五月、父が出征して行きました。当時三十七歳。私たちは建築会社の現場監督をしていた父、母、祖母、私（八歳）、弟（六歳）、妹（二歳）。

逃避行

柏原市 佐々木初代（65歳）

※①満州國
日本が満州事変により、中国の東北3省および東部内蒙古（熱河省）をもつて作りあげた傀儡（かいらい）国家。1932年、もと清の宣統帝であつた溥儀（ふぎ）を執政として建国、34年に溥儀が皇帝に即位。首都は新京（長春）。45年、日本の敗戦によつて消滅。

※②学徒動員
1943年、それまで兵役を免除されていた大学・高等学校・専門学校の学生たちも戦場に駆り出されることになった。特攻隊員になつて敵の艦船に体当たりしたり、前線に向かう途中の船（と沈められたり、またあるいは病氣に倒れたり、その後多くが二度と母の顔を見る）ことはなかった。

※③坐棺
死者をすわった姿勢で納める棺。

※④ケロイド
皮膚の切傷や火傷のあとにできる瘢痕（はんこん）が、異常に増殖して隆起したもの。原爆被爆者に多発した。

※⑤スカンボ
野原や道端に生息する植物で、スイバの別称。イタドリの別称。
※⑥青島（チンタオ）
中国山東省の南東部、膠州湾の南東端にある港湾都市。

※⑦憲法九条
第二章 戰争の放棄
第九条 日本国民は、正義と秩序を基調とする國際平和を誠実に希求し、國權の發動たる戰争と、武力による威嚇又は武力の行使は、國際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他、他の戰力は、これを保持しない。國の交戦権は、これを認めない。

※⑩賈出し
食料品を市場や生産地に出かけて買つくること。

満州安東市という所に住んでいました。

出征する朝、社宅の前でヤンチョ(※①)に乗り、「心配しないで待ってるよう

に。母さん、ばあちゃんと仲良く待つて」と言って行きました。ヤンチョの姿

が見えなくなるまで手をふって送りました。父はどんな気持ちだったでしょう。

五十七年過ぎて、今、父の気持ちも分かり子どももその年になり、絶対

戦争なんかに行かせませんが、当時はそれができなかつたのです。母もどん

なに辛かつたでしょう。子どもには涙は見せませんでした。

ラジオや金物、貴金属(※②)は没収され、社宅に一、二台しかないラジオ

で大切な放送があると言つて、祖母は聞きに行き、泣いて帰つて來たのです。

「戦争に負けた。もう内地(※③)に帰れない」と言つて。祖母は内地に帰る日

を夢見て、日本のお札を窓ガラスに、しわが延びるように貼つて貯めていたの

です。

終戦の日からは、毎日毎日父の帰りを待ちました。社宅内で歸つてきた

人がいたのです。革靴の音がすればみなで玄関(※4)に出て待つのです。毎日、何

十日そんな日が続いたことでしょう。二十年の冬、あんなに内地に帰りたが

つてた祖母が三日で他界(※5)してしまいました。午後八時から戒嚴令(※6)が出され、医者にも診せてあげられず、お葬式もできず、火葬にだけはできました。末期(※7)の水は、一人一人名前を言えば、苦しいのに口を開け飲んでくれました。その時のこと、私が生きている限り忘れません。母はどんなに悔しく悲しかつたかと思うと胸がいっぱいになり、可哀想でなりません。

二十一年五月頃、内地に帰れるということで、何百人が揃つて船の出る所まで歩いていくことになりました。私と弟は夏布団一枚ずつ背負い、母は妹を前に抱き、重い食料品を背負いました。何日何十日歩いたでしょう。行列を作つて離れないように、男の人はほんのわずか。後は女子ども、老人で

と言つて現地人が母に言います。離せばもう会えないと決して離さなかつた母。今の私に母の真似(※8)はできないと思ひます。

「内地に帰つたら父ちゃんが帰つてくるから、頑張つて」と言い続けていた母に、六歳の弟は黙つてついて歩きます。途中で廃校になつた日本の学校に野宿するのですが、あつちうちで、毎日人が亡くなつていくのです。何ヵ月歩いたか分かりませんが、やつと港にたどり着き船に乗ることができました。船の中でも人が亡くなつて行きます。死体をムシロ(※9)に巻いて船から海上へ投げ込まれる様子は、子ども心にも傷つきました。

やつとの思いで博多の母の故郷へたどり着きましたが、船から降りるとDDT(※10)を頭から真っ白になるまで体中かけられます。故郷にたどり着き、来ていると信じていた父は帰つません。それから母は寝る暇もなく働き続け、子ども三人のためになりふりかまわず何時も働いている姿しかない母のもとに、昭和二十三年待ちに待つた父が帰つて来ました。バスから降りて言った開口一番が「お婆ちゃん元気か」。

父も母も戦争で人生を壊されました。人と人とがどうして殺し合いをしなければならないのか、戦争の二文字を見ると寒気がします。戦争のない平和な世の中であつてほしい。今では父も母も他界してしまいましたが、父母には感謝の気持ちでいっぱいです。戦争のない時代が続きますように祈らずにはいられません。

※①ヤンチョ(洋車)
人力車のこと。中国語で「東洋車」略。

※②貴金属
産出量が少なく基調な金属。空気中で酸化されず、かつ化学変化を受けることが少ない。金、銀、白金、イリジウムなど。

※③内地
国の領土内で、新しい領土または島以外の地。日本でもと朝鮮、台湾、樺太(サハリ)などを除いた領土を指した。

※④ムシロ
蘭(いぐさ)、蒲(がま)、藁(わら)、竹などで編んだ敷物の総称。

※⑤DDT
身体や衣類に付着したノミやシラミなどの害虫を駆除する薬品。